

學位請求論文要旨

# 真宗民俗史論

蒲池勢至

本論文は、第一章から第五章にわたって真宗民俗、すなわち真宗門徒の民俗について論じたものである。従来、民俗学研究において真宗民俗はきちんと捉えられず、位置づけられてこなかった。そこで「真宗民俗史」という方法論と研究課題を明らかにしたあと、葬送儀礼・名号と御文・地域における寺檀関係と民俗・蓮如上人絵伝という具体的事例の研究を通じて、真宗門徒の民俗伝承と形成について歴史民俗学の立場から論じた。

第一章「真宗民俗史の方法と課題」では、なぜ「真宗民俗」を論じる必要があるのかを明らかにするため、最初に「真宗と民俗」の関係から「真宗の民俗化」と「真宗の反民俗性」という問題視角と枠組みを設定した。真宗門徒の生活や信仰も民俗的なあり方をしている。一般民俗に対して、対立も否定も共存も習合もあった。だから習合論だけでなく、反民俗性という民俗否定的な問題を見落としてはならない。非習合論にして「民俗の真宗化」であり、「真宗の民俗」＝真宗が生み出した民俗である。

真宗門徒の民俗は、真宗教義や教団によって作られた儀礼・行事が地域社会のなかで定着し、門徒によって伝承されてきたものであった。真宗や真宗門徒の中に、従来の民俗学が示してきた日本人の民俗性を探ると同時に、真宗が生み出した真宗門徒の民俗を捉えなければならぬ。こうした真宗民俗論には、門徒の民俗の中に民俗性と反民俗性の要素があり、地域における民俗と歴史の問題、民俗形成の課題があるとした。真宗門徒の信仰や生活については、歴史学の近世真宗史や思想史でも議論されてきたが、真宗特殊論として批判されていた。たしかに真宗および真宗門徒は特殊な性格を有しているが、この「特殊」を研究することは、「普遍」「一般」とされてきた信仰世界や民俗的世界観を逆に相対化することもできるのではなからうか。民俗学は現在を基点にして、現在まで伝承されてきた民俗の変遷と構成・機能を追求する。真宗民俗の研究は、伝承の歴史性を遡源的に考究することによって、真宗門徒の「民俗史」と基層信仰の姿も明らかにすることができるのではないかと主張する。

第二章「真宗門徒の葬送儀礼」では、本願寺宗主と門徒の葬送儀礼をとりあげる。宗主の葬送史料から儀礼全体の構成と特質を捉え、禅宗の葬儀は没後作僧と引導・下火を中心とする成仏儀礼、真宗の葬送儀礼は死者が往生した往生儀礼とした。真宗の棺蓋名号などは、遺骸に対する呪術的意味や成仏儀礼としての入棺作法を真宗的に改変したものであった。一方、四門儀礼は否定した。真宗の葬送儀礼は、宗派に関係のない遺骸処理にともなう民俗儀礼の上に、すでに蓮如期に葬送儀礼を確立させていた禅宗などの儀礼を真宗的に変容させて成立した。

真宗門徒の葬送儀礼については、湖北地方の現行民俗であるオソウブツを中心に論じる。一五〇〇年代から一六〇〇年代初頭にかけて、教団から下付された絵像本尊が門徒の葬儀に使われているが、この阿弥陀如来の絵像は近世に寺院化する以前の道場本尊であった。現在はリンジュウブツ（臨終仏）と呼ばれているが、もとはソウブツ（惣仏）である。戦国期から近世社会成立へとという中で、近世村が成立して道場も寺院化していく。門徒集団も惣結合から講集団へと変化し、絵像本尊も「惣仏」から「講仏」へと性格・機能が変化したと指摘する。

第三章「名号と御文の民俗」は、真宗門徒の名号祭祀や御文拝読という繰り返しの行為を民俗とみて考察したものである。門徒は「南無阿弥陀仏」の名号を蓮如以降、現在まで祭祀してきた。この名号祭祀形態の変遷と意味・機能について、近世初期から道場が寺院成りし、門徒家にも仏壇が成立してくるという過程の中にさぐった。六字名号を本尊とした「名号の時代」は短く、道場が寺院化していく一六〇〇年から一六五〇年ころは、次第にその宗教的役割・機能を終えていった分岐点であった。

「御文拝読」ということは、真宗にとって、また門徒にとつてすぐれて類型的かつ強力な行為伝承であり言語伝承である。門徒は御文をどのように読んできたのか、伝承させた力は何であったのか。本願寺が近世教団として出発するまでは卷子装などの「証判御文」が主流であり、門徒の前で実際に拝読されていた。『五帖御文』は門徒家の仏壇成立過程の中で普及し、反対に卷子装御文は忘れ去られていった。が、一六〇〇年代後半にいたって再び御文は御消息という卷子装の体裁で復活し普及する。「御文御書」と呼ばれる御消息であった。これは近世の講を対象として成立普及した。御文を伝承させた力は、蓮如のコトバである。門徒はコトバを丸ごと受け取る聴聞の仕方、読み上げられるコトバはまさしく「蓮如の声」であった。

第四章「真宗門徒の村と民俗」は、フィールドワークを中心にした地域論、真宗門徒の共同体論である。ムラの寺檀関係を詳細に調査して、ムラの成立、村内寺院の成立から寺檀や民俗の形成について述べた。尾張西部の木曾川下流域には複檀家（半檀家）がみられる。男女別に檀那寺をもつ複檀家がどうして成立したのかという問題を、講下制度・配下制度という「ムラと家と寺院」との関係から考察した。複檀家の成立は、近世の新田開発によってムラが成立してもムラの中に寺院がなく、農民は入植以前の寺檀関係を継続していた。それが「ムラと家とジゲ寺」との関係によって、複檀家が成立した要因である。

「西三河における真宗門徒の村と民俗」では、「真宗門徒の村」と「民俗のあり様」について述べる。門徒の村であっても複雑な寺檀関係

を形成しており、そこに村の開發や村内寺院の成立、さらに寺檀關係が規定する村の信仰と民俗傳承の形成が看取できる。とりわけイットウという同族が寺檀關係に関わっていた。近世の村が成立し、道場が寺院化して寺院が門徒と新たな寺檀關係を形成していったとき、イットウの草分け的な家が依然として本證寺や上宮寺・勝鬘寺との手次關係を維持したので、村内が複雑なイットウごとの寺檀關係になったのである。

「信仰民俗の地域差と真宗」は、尾張・三河という愛知県全体のなかで真宗優勢地域の民俗的特徴を捉えようとしたものである。県内を概観すると、大きくは禅宗が尾張東部、三河東部と山間部、渥美半島、真宗が尾張西部、三河平野部と棲み分けていて、その間に浄土宗他の寺院が展開している。この宗派分布の中でジノカミ、ジルイ、イットウ、百人松明行事、全拾骨と一部拾骨、両墓制、無墓制という民俗の分布と地域差を示した。真宗地域では、従来、民俗学が描いてきたような民俗儀礼体系が成立しておらず、初盆に対する意識が希薄、遺骨に対する信仰も希薄であった。

第五章「蓮如傳承の生成と門徒の信仰」は、蓮如上人絵伝を民俗資料として蓮如傳承の生成や門徒の蓮如信仰を捉えようとした「蓮如」の民俗信仰論である。蓮如上人絵伝の多くは、寛政十年（一七九八）の三〇〇回忌から明治三十一年（一八九八）の四〇〇回忌にかけて、門徒が私的に制作したものであった。絵伝成立にとつては、蓮如三〇〇回忌が大きな画期であったといえる。絵伝全体としては、蓮如が「権化の再誕者」であったことを語っていた。蓮如傳承は生成と再編されて伝えられてきた。女人と大蛇濟度の伝説などは典型例である。絵伝の絵相を手がかりに伝説の成立時期について考究し、蓮如上人絵伝と伝記の關係、絵解き台本などの資料も発掘して報告した。

「蓮如」の世俗化と民俗化についても言及した。蓮如は『石山後日 れんげ上人』のように浄瑠璃化されて物語となり、「権化の再誕者」から「生き如来」へと門徒の蓮如像が変化していった。民俗化とは世俗化したものが一定の型、すなわち言葉（口頭傳承）や行為（行為傳承）でもって時間的に伝えられる文化現象のことである。門徒は蓮如の遺跡やさまざまな遺品とされるもの、伝説などを通して蓮如その人と結びついていこうとする。毎年繰り返される蓮如忌や「蓮如上人吉崎御下向」行事、読縁起、蓮如上人絵伝と絵解き説経などに結縁して、門徒は蓮如に出遇ってきたのである。日常生活においては、毎日の御文拝読であった。こうしたさまざまなモノ・コトを通して門徒の蓮如信仰は形成された。蓮如上人絵伝は、まさしくこの門徒の蓮如信仰が生み出したものでり、門徒の蓮如像は絵伝の中に描かれた姿といつてよい。

蓮如上人絵伝や蓮如忌などの行事には、「法主信仰」と「蓮如信仰」が表出されている。そして「法主信仰」と「蓮如信仰」は、ともに「生

き神（生き仏）信仰」として捉えられる信仰形態であるが、両者に違いもあった。法主信仰は真宗が教団化して職能として発生・形成された信仰で「氏神型」、「蓮如信仰」は真宗を中興した蓮如という人物その人に対する門徒の信仰で「人神型」であった。

現在の民俗学は研究対象を見失い、歴史を捨てて、現代の中に新しい方向性を切り開こうとしている。それも民俗研究の一つの可能性であるが、本論文で提起した真宗民俗史の課題と研究対象、地域のフィールド調査に基づく民俗資料と文献史料をともに生かす方法も、また一つの歴史民俗学としての可能性であろう。